

氏名	大森 記詩
ヨミガナ	オオモリ キシ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第573号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 架空の断片-プラスチックモデルから着想した彫刻表現- 〈作品〉 Training Day -Far East Suit- / Stealth Circle /Untitled(Green) 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	木戸 修
(論文第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	佐藤 道信
(作品第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	林 武史
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	

(論文内容の要旨)

本研究は、自身の彫刻作品の成り立ちにおいて重要な位置を占めている「プラスチックモデルからの着想」という観点から展開する。実在と非実在を問わず、異なった背景のモチーフを、規格化されたスケールに基づいて縮小、解体し、プラスチックという樹脂素材に置き換え断片化するという特性は非常に興味深い。これにより作り出されたプラスチックのパーツを、私は「架空の断片」と考えている。この影響を受け、私はこれまで断片性に焦点化した彫刻作品の制作を試みてきた。

本論文は以下の3章で構成される。

第1章「架空の断片への傾倒」では、私が傾倒してきたプラスチックモデルの日本における特異性について、また傾倒の要因となった美術作品との遭遇体験を述べる。

第1節「プラスチックモデルという状態」では、プラスチックモデルの特性と文化的側面、我が国における「プラモデル」という「文化の漂着点」としての特異な展開を概観する。

第2節「中空の尾翼」では、私がプラスチックモデルや模型製作へと傾倒することになった要因として、今に至るまで大きな影響を受け続けてきた立体作品である原口典之の《A-4E. Sky. Hawk》を挙げこの「戦闘機尾翼作品」と対面したことで、私がプラスチックモデルへと傾倒することになったという経緯を明らかにする。

第2章「架空の断片を制作する.-自作品の変遷と試み-」では、実践編として、私の作品制作の変遷を辿る。

第1節では、まず私が模型制作の技法の一つとして特に重点的に用いてきた「ミキシングビルド」について述べる。複数の異なる部品を組み合わせ任意の形状を作り出す技法は、「スター・ウォーズ」に代表されるSF特撮映画での「ミニチュアモデル(特撮用模型)」が、大量のプラスチックモデル部品を流用して制作されたことにそのルーツがあることを明らかにする。

第2節では、このモチーフが縮小化して分割された部品を組み合わせ新たな形を作り出すことに範をとり、「架空の断片」たるプラスチックモデルの部品を素材として組み合わせる彫刻作品の制作を行っ

たことで得ることのできた発見と課題点など、一連の所感について記す。

第3節では、「架空の断片」そのものを制作する試みについて述べる。私はここで、特に金属鋼材をその素材として用いている。これはプラスチックモデルとなってきたモチーフの多くが、金属鋼材によって製造されてきた工業製品ということへの興味によるものであった。この中で、社会的な需要から大規模に製鋼された鋼材が、その原初から「断片性」を多分に有していることに着目している。

第4節では、自作品で用いてきた「塗装」について述べる。金属鋼材を用いることにより自作品の形状を「断片性」に焦点化することを試みているが、塗装は、この断片性を強調するものとして用いられている。この試みの過程で制作した作品について解説する。

第5節では、彫刻と模型製作、双方の造形過程で用いる素材「ポリエステルパテ」に着目している。これを作品の断面に充填することで、本来は消費素材として「顧みられない物質」であるポリエステルパテを「顧みられる物質」として変性させた試みについて述べる。

第3章「博士審査展提出作品を通して」では、博士審査展提出作品《Training. Day. -Far. East. Suit-》、《Stealth. Circle》、《Untitled(Green. 3)》の3点を主軸として述べる。

第1節「架空の断片により作られた世界観.-《Training. Day. -Far. East. Suit-》-」では、プラスチックモデルパーツを彫刻素材として直接的に用いた等身大の立像《Training. Day. -Far. East. Suit-》について述べる。この作品は、プラモデルパーツが無数に組み合わせられた像容から「文化の漂着点」としての特異性を視覚化し、その影響下にある自身の世界観を具現化したものである。また、この前作である《Training. Day-樹脂片観音菩薩像-》についても記し、関連作品として提出作品制作に至る展開を明らかにする。

第2節「現在を表す記号として-《Stealth. Circle》-」では、最新鋭航空機に施されている国籍標識をモチーフとして鋼材のフレーム上に塗装することで、現在の事象を断片的な形態上に表わし、焦点化した《Stealth. Circle》について述べる。

第3節「自立する架空の断片《Untitled(Green. 3)》」は、金属鋼材を用いた形態に生じる空間にポリエステルパテを充填することで断片性を強調する作品制作の変遷を辿る。これまでポリエステルパテを充填した断片作品を垂直面である壁面へと設置していたが、これを水平面へと設置する試みとして制作した提出作品《Untitled(Green. 3)》と、関連作品の展開について述べる。

最後に本論の終章として、断片性に焦点化した一連の制作を経て、「架空の断片」である彫刻作品の制作を続けていくことについて、自身の考える意義について述べる。

#### (論文審査結果の要旨)

本論文は、「プラスチックモデルから着想した彫刻表現」を行っている筆者が、両者に共通する「架空の断片」性を軸に論述した創作論である。

筆者にとってそもそもモノを作る最初の体験がプラモデル製作だったらしく、現在筆者はそのプラモデルパーツをモチーフに鉄素材で制作し、時にプラモデルのパーツじたいを素材として使った作品を制作している。現実を縮小、パーツ化したプラモデルと、彫刻という概念で作者の現実認識を造形化した彫刻作品は、筆者にはともに「架空の断片」として共通する。趣味と表現のモチベーションが一体化した、リアリティの強い論考となっている。

第1章「架空の断片への傾倒」では、欧米・日本でのプラモデルの歴史を概観し、それを様々な分野のモチーフがたどりつく「文化の漂着点」だとする。そしてプラモデルと彫刻が筆者の中でつながった契機として、F4ファントムⅡの尾翼部分を再現した原口典之の巨大な作品「A-4E- Sky Hawk」(1996)に、制作アシスタントとして参加した経緯と作業内容を詳述する。これが以後、筆者が多く航空機をモチーフに鉄やポリエステルパテで制作する現在までいたる制作方法に、大きな影響を与えているとする。第2章「架空の断片を制作する—自作品の変遷と試み」では、筆者の実際の制作上での手法を解説。スターウォーズのミニチュアモデル制作でも行われた、複数のパーツを使って一つの形とする「ミキシングビルド」、社会の断片としての鋼材の使用、断片性を強調するための鋼材への塗装や断面の強調、そ

の断面に塗り込むポリエステルパテ（プラモデルの接着剤に相当）の使用などについて述べる。そして第3章「博士審査展提出作品を通して」で、プラモデルの実際のパーツを集めてパイロットを形作った「Training Day-Far East Suit」、ステルス機に塗られる低視認性の灰色の日の丸「Stealth Circle」、断面と断片性を強調した「Untitled (Green3)」について解説している。

プラモデルのパーツを、社会の断片たる重厚な鋼材で表す意外性、プラモデルパーツを集めミキシングビルドで仏像の千手観音や半跏思惟像を作ったSF的な作品など、筆者のイメージネーションは豊富だ。それは趣味と制作が一体化あるいは表裏となり、相互反照することで生まれる豊かさかもしれない。何より作者自身が楽しげな様子が観者にも伝わる。

筆者はプラモデル雑誌に寄稿、編集の経験もあるらしく、冗舌なまでの文章力、豊富な専門知識、レイアウトの的確さはほぼプロ並みともいえる。学位にふさわしい内容とレベルの論文として、審査会で高い評価を得た。

#### （作品審査結果の要旨）

大森記詩は、幼少期から慣れ親しんだプラスチックモデルを出発点とし、そのモチーフである金属鋼材の工業製品に興味を持ち、その製作過程や処理を考察することで自らの断片性を見出した。その考究の結果、彫刻作品は「架空の断片」であるといった思考が生まれた。

審査した提出作品は3点である。

作品《Training Day -Far East Suit-》は、航空機のプラスチックモデルに付属するパイロットをモチーフに、これまで収集したプラスチックモデルの部品の集積によって等身大のフラットスーツ着用のパイロットを彫刻したものである。無数のパーツを組み合わせるミキシングビルドの手法を用いて現れた立像は、現実と架空の世界の境界が不明確な現代の様相を、視覚的に認識させる作品となっている。緻密に計算された各パーツのカラフルな配置の像が鋼材の台座に不気味に立ちはだかる存在感は、素材の持つ時間性、現代の精神性、社会性などを暗示し、申請者とプラスチックモデルとの関係を鮮明に表している。

作品《Stealth Circle》は、自衛隊の最新鋭機に施されている国籍標識をモチーフにした作品である。これは、先端技術の識別能力の進化に伴って視覚的な認識性の要素は失われ、電子の世界での記号化が進む現代を象徴している。鋼材に実寸大で塗装された国章は、航空機の左右主翼部分から切り取られた四辺形の中心に灰色枠の円があるのみの単純化された作品で、一見これが何を表現しているのか解らない体裁になっている。しかし、申請者は、現代の事象を架空の断片に描かれた記号として提示することで焦点化を試み、自身が存在する現在と、その背景にある人間の多義性へと思考を展開させている。

作品《Untitled (Green.3)》は、金属鋼材の隙間にポリエステルパテを充填することで、断片性を強調させる作品である。本作品は、プラスチックモデルパーツにポリエステルパテを充填する試みから始まり、制作過程の中で発見した鉄とポリエステルパテによる視覚的コントラストを用い、鉄の重厚な特性とともに「架空の断片」を現出させた。前出の2作品と断片に関しての着眼点は共通するが、作品の展開、成立、形状と大きさに違いが見られる。それは、創出した形が、断面のシルエットを強調しながらも、これまでの既存の形からの引用ではないその先にある形を意識した独自の「形の理由」を生み出したからである。

本発表において申請者は、架空の世界に遊ぶことで、現実を冷静に見据える手段を提示し、自身が世界の断片であること、そして自身が存在する現在への思考を巡らせるための装置として作品があることを導き出した。数多くの試作や作品の変革によって生まれた提出3作品は、いずれも深慮をめぐらされた痕跡が随所に見え、密度のある作品となっており秀作である。

以上の結果、提出作品が審査委員一同の高い評価を得て、博士学位授与に十分値すると判断した。

#### （総合審査結果の要旨）

大森記詩は自身の幼少からの記憶を掘り起こし、現在の感性を作り上げている要素を探ることが今のそしてこれからの作品制作に重要なことであると考え博士課程の3年間の題目としてきた。

論文題目は「架空の断片—プラスチックから着想した彫刻表現—」とした。プラスチックの歴史的な考察や彼の興味の対象であったプラモデルの世界の精細な記述などは、大森の思考の形成過程が伺える論文の重要な論点といえる。プラモデルから始まった一連の制作過程や制作方法は、プラスチック、樹脂、金属、など多種多様な素材を使用することで展開していく大森の制作思考を支える重要な要素となっている。いかにすれば材料や素材に作品を語らせることができるかは難しい課題ではあるが、大森の思考や制作方法はこの問題を解決する道筋を探ってきたといえる。論文においては地道な考証を積み重ね記述を進めており、その論文評価は非常に優れたものとなった。

一方幼少期の美術作品との遭遇が、いかに彼の美術家としての将来に大きな影響を知らず知らずのうちに与えていたかの考察は、大森記詩の作品を理解する上での重要な要素である。その原点とも思える出会いから様々な事柄を考察し、制作に至る過程や作品を制作する上での方法など独自の感性で制作を進めてきた。それらは制作上の実際の材料や現代の美術での表現方法としての素材の選択、また技術的な問題を詳細に突き詰めることによって、そこから現代の社会の問題点や社会と美術表現との関係性を考察することへと展開していく。言葉をかえれば素材の持つ魅力や特性が美術の表現においてどのような可能性があるかを解き明かすかを考察したともいえる。また素材の考察はさらに素材表面への考察へと進み、そこにあらわされる表面に施される記号や標識などから作品制作の新たな展開へと発展していく。博士展で発表した3作品はこの彼の進んできた過程を如実に示しており、この博士課程で制作考察した事柄は彼のこれからの制作の方向性を指し示していく重要な道程である。

以上の観点から作品、論文共に博士課程での十分な成果を上げたと判断し、ここに合格の評価を与えるものである。